盥嗽

〔日本書紀（推古）二十二〕二十一年十二月庚午朔、皇太子（厩戸）遊行於片岡、時飢者臥道垂、（○中略）則歌之曰、斯那提流、箇多烏箇夜摩爾、伊比爾惠氏、許夜勢屢、諸能多比等阿波禮、（○下略）

〔萬葉集（挽歌）三〕十六年（甲申）春二月、安積皇子薨之時、内舍人大伴宿禰家持作歌六首、（○中略）和豆香山、御輿立之而、久堅乃、天所知奴禮、展轉泥土打雖泣、將爲須便毛奈思、

〔空穗物語（國讓下）〕わがさいはいなく、はぢみるべきすぐせの有ければ、心ちのとし月こそあれ、かかる年月をみる事と、ふしまろびなき給、

〔源氏物語（蜻蛉）五十二〕わかきもの共のことおほせられたるは、たのもしきことになんなどよろこぶをみるにも、ましておはせましかばとおもふに、ふしまろびてなかる、

〔榮花物語（浦々の別）五〕中納言殿（○藤原隆家）は京いでたまひて、たむばざかひにて御馬にのらせ給ぬ、御車はかへしつかはすとて、とし比つかはせ給けるうしかひわらはに、此うしはわがかたみにみよとてたべは、わらはふしまろびてなくさま、まことにいみじ、

〔新撰字鏡口〕咉（子葉市狹二反、志波不支、又口須々久、）

〔類聚名義抄（九皿）〕盥（○管貫二音、テアラフ、）洗手面也

〔同（五水）〕漱、涑（所雷反、失豆反、又速音、クチスヽク、○又速隻反、クチスヽク、）

〔伊呂波字類抄（久人事）〕嗽（クチスヽク）漱（已上同）漱石是也

〔同（天人事）〕盥（テアラフ）澡手也、澡（澡浴水是也、）盥乖（已上同）

〔下學集（態藝下）〕鵜飼（ウカイ）也嗽

〔運歩色葉集（宇）〕嗽口（ウガイ）

〔日本書紀（敏達）二十〕十年閏二月、蝦夷數千寇於邊境、由是召其魁帥綾糟等、（○中略）於是綾糟等懼然恐懼、乃下泊瀬中流、面三諸岳、漱水而盟曰、（○下略）

〔續日本紀（元正）七〕養老元年十一月癸丑、天皇臨軒詔曰、（○中略）覽當耆郡（○美濃）多度山美泉、自盥手面、皮膚